

ツメナガホオジロの標識第1報

常家伝・韓穎・杭 颯 蘭・李飛

東北林業大学

訳 福井和二

東北林業大学野生動物資源学院渡り鳥標識ステーションは、1988年11月7日～12日と1989年11月2～10日に黒竜江省肇州県双発郷(45° 42' N, 125° 15' E, 海拔148m)においてツメナガホオジロ(*Calcarius lapponicus coloratus* Ridgway)の標識を行い、その他と共に1851羽を放鳥した(表1)。

表1 標識鳥類と数

年度	脚管	ツメナガホオジロ	コヒバリ	ハマヒバリ	ベニヒワ	チョウゲンボウ	計
1988	B00	651	1	2	1	-	655
1989	B01	1191	2	-	-	3*	1196

*チョウゲンボウにはG01型脚管を使用

肇州県は、^{スツン}松嫩平原¹にあり、ほとんどが乾燥した耕地と草原である。ツメナガホオジロは春と秋、渡りのために、この地を通過する。彼らは大群を作って行動し、飛びながら鳴き、耕地や草原で採食する。双発郷の農民はよく無双網を使ってツメナガホオジロ(俗名鉄雀)を獲る。我々はこの捕獲技術を利用して彼らの網場で、1988年(11月7日～10日)と標識調査をおこなった。後期(11月10～11)と1989年には、村民が捕獲して村まで持ち帰ったものに標識を行い放鳥した。

網場では寒冷と強風で標識作業が困難なため、2～3人一組で1日1人20～30羽しか標識できなかったが、室内では午後2時頃村人が持ち帰った鳥を夕刻までに作業を完了した。2人一組で1時間20～50羽の標識を行った(表2.3)。

表2の中で1988年の体重値が1989年のものに対して大きい。その理由は、1988年は野外

表2 ツメナガホオジロの体位測定値

年度	性別	体重g	体長mm	翼長mm	尾長mm	ふ蹠mm
1988	雄	(22-34) 24.9 n=81	(135-169) 147.6 n=93	(82-99) 90.6 n=99	(53-70) 62.4 n=99	(18-24) 20.1 n=98
	雌	(20-27) 23.0 n=43	(130-155) 143.9 n=9.8	(80-95) 87.5 n=99	(50-68) 60.3 n=99	(17-23) 19.6 n=98
1989	雄	(20-25) 22.7 n=29		(82-96) 91.1 n=29	(87-76) 66.5 n=27	(18-25) 21.3 n=29
	雌	(18-23) 20.7 n=19	—	(81-92) 86.4 n=19	(57-67) 62.9 n=16	(17-24) 20.7 n=19

の網場において計測したので、捕獲から計測までの時間が短くそれだけ、真実の体重が記録され、1989年の場合は村まで持ち帰り、午後から測定したので、測定までの時間のストレスによる消耗と思われる。

表3 ツメナガホオジロの性比

年度	雄雄		雌雌		計	
	数量	%	数量	%	数量	%
1988	406	(55.1-69.8) 62.4	248	(30.2-44.9) 37.6	65.1	100
1989	749	(50.5-70.7) 63.4	432	(29.3-49.5) 36.6	1181	100
平均	(1155)	63.0	(677)	37.0	(1832)	100
性比	1155 : 677 = 1.71 : 1					

* %の計算は毎100羽の脚環を1統計単位とした。

表3において見られるように群れの性比変動は雌30～50%の間で、平均値は37%(n=1832)であった。雄：雌の比は1.71 : 1である。

双発郷網場によるツメナガホオジロは50年以上の歴史があり、全村では約200の無双網を所有している。毎年霜が降りるころ(10月23日頃)から始まって、立冬、小雪²の頃まで続く。1人で1網を扱い、毎日数十羽から百余羽を、多い人は二三百に達することもある、かつては460羽、550羽という記録もある。大体は1網30羽程であるが、60羽から90羽と獲られたこともある。人により1冬3000羽以上を捕獲するという。しかし、多くの人がいうには、最近は、ちょっと前ほど獲れなくなった。資源量が減ったのだと説明していた。彼らは日の出前(6時半頃)、無双網を仕掛ける。日の出と共にツメナガホオジロの活動が活発となるからで、つまり、夜明け前2時、3時に家を出る。彼らは経験で、微風の時が最もよく、風がなくても、また、大風でもよくないことを知っている。夜のうちにわずかな雪が降って、日中晴天となるとツメナガホオジロは多く、北の方が冷え込むか雪が降ると渡来が多い。西南の風が吹けば、去った鳥が戻ってきてよく獲れる。土手を越える鳥は獲りやすく、しかし、いつまでも同じところには、彼らが回を警戒するようになり、網に近寄らなくなるから獲れなくなる。雑草の多く生えた耕地は草の種子が多く、鳥が集まり、網を仕掛けるのに適している。網を仕掛けるのには、さらに風向きに注意しなければならない。こうして、1日に2、3回網を架け替えることもある。冬は積雪が少なく、12月(旧暦)が猟によいとされている。当然、ツメナガホオジロの越冬期である。正月15日(旧暦)頃、積雪が次第に解け、ツメナガホオジロは北へ渡りを始め、この時期の猟は秋ほど多くなく、1日3、40羽程しか獲れない。このころには雄は頭、喉が黒色に変わり、囀りが聞かれるようになる。

報告によると、ツメナガホオジロは遼寧省盤錦と撫順では冬鳥として越冬している。

秋の肇州原野ではツメナガホオジロ以外にハマヒバリ、コヒバリ、ヒバリ、ベニヒワ、ユキホオジロ、ハイタカ、ハイイロチュウヒ、チョウゲンボウなどが渡りをする。ハイタカとチョウゲンボウは時々、ツメナガホオジロを追跡中に無双網により捕獲されることがある。このほか、ノガン、ガン、ツル等が10月下旬から11月に草原上でよく見られる。

1988年10月、当地で捕獲された1羽のツメナガホオジロの脚帯にMOSKWA XD942808と記

号があり、ソ連鳥類標識局に連絡したが回答がなかった。

1988年に標識した655羽中のB00-9595が翌日再捕獲された。また、1989年11月7日に標識放鳥した1196羽のうち、B01-6132が11月9日、約30km離れた南甸子^{フンダンス}で再捕獲された。再捕獲率は非常に低く、ツメナガホオジロは大群であるのに対し、標識された数はその極く一部分であることによる。

数多くのツメナガホオジロの標識を行ったこの2年の経験から、幾つかの問題があることがわかった。

1. 無双網によるツメナガホオジロの捕獲は、非常に高い技術を要し、気象や場所の選択、さらに難しいのは、真に迫った口笛を吹いて、丁度よい時機に網を引く、その口、眼、手を最高の一瞬に合わせる勘である。当地でも1日に数羽か十数羽しか捕獲できない人もいる。我々の標識ステーションにはこのような専門家はいないし、短期でこの技術を身につけることは困難である。したがって、現在我々は、これらの技能者を出来高払いで雇っている。ただし、当日持ち込まれたものは当日捕獲されたものである。

2. 低い標識鳥の回収率。今日まで、1989年秋に回収された上記3羽を除いて、1990年3月13日標識地点から約120km離れた吉林省乾安県寸字井郷^{ウツアン}において回収された(B01-6747)1羽のみである。現在、この鳥の渡り経路、越冬地は詳しく知られていない。そのため、標識調査について、さらにテレビなどによるPRの努力を一層強化することにより回収効果を上げることができるのではないか。遼寧、河北、山東各省など、ツメナガホオジロの越冬地での多くの人々による標識回収の連絡を我々は期待している。同時に、全国鳥類標識センターは、野生動物保護協会と共同で、標識調査の意義と標識された鳥を見つけたときの処置と連絡方法をポスター、パンフレット等で宣伝することを提案する。もし、我々が捕獲用具をもって越冬地に行き、捕獲することが許されるならば、回収率を高めることができるであろう。

3. 標識作業中、記録もれと、記号の読み間違いによる重複などが1~2%程度発生する。記録もれは作業の繁忙から起こるもので、記号の読み違いの原因はリングに刻印された字の太さ、似た数字の読み間違いである。リングB00型はB01に比較して数字の識別が困難である。全国鳥類標識センターではリング製作に際して考慮すべきである。たとえば、間違いやすい3と8、5と6などは間違い難い字体に変えることを提案する。

4. 標識放鳥時に羽毛の一部を染色すると、人の注意を引き、回収率を高めるのではないか。

5. 早春(元宵節、旧暦1月15日後)にツメナガホオジロの渡りの行動を観察しなければならない。

6. ツメナガホオジロの年齢は正確に識別することは容易でない。また、渡りと滞在期間などは天候と関わりが深い。それらの研究もさらに進めなければならない。

訳注

- *1 松嫩平原は松花江上流と嫩江流域の平原地帯、松花江下流と黒竜江、ウスリー河の合流地域を三江平原、遼河流域を遼河平原として、中国東北部の三大平原と呼んでいる。
- *2 立冬=陽暦11月7日または8日にあたる、小雪=陽暦11月22日または23日にあたる。